

## 今月のトピックス 「ネギ類の病害虫について」

ネギ、タマネギ、ニンニク、ニラ等には共通して発生する病害虫が多く、それらの主要なものの特徴を紹介します。

- 1) さび病 春と秋の 2 回発生します。真冬は潜伏期間が非常に長く、真夏は一時的に姿を消します。秋から冬にかけて形成された胞子は今年のように 3 月の気温が高く降雨が続くと多発します。また、窒素肥料が多く軟弱に育っていると更に被害は多くなります。予防するとともに発生状況に注意し、春の初発を認めたら、周囲への感染を防ぐため早期に対策を施す必要があります。
- 2) 疫病 最も一般的に見られる病害で、特に梅雨期から初秋にかけて降雨が多いと発生しやすく、葉先から上半部にかけて多く発生し、初期は白色の菌糸を生じ病斑を形成し、後に黄白色となります。
- 3) べと病 春と秋に発生しやすく、楕円形の黄緑色の病斑上に白色から暗紫色のカビを生じます。雨が続けば二次感染を繰り返します。
- 4) 黒斑病 梅雨期と秋雨期に多く発生しますが、葉ネギではさび病等他の病害の防除をするためかほとんど見当たりません。白ネギでは展葉速度が遅いのと、比較的防除回数が少ないのか、年間を通じて病斑が認められます。
- 5) 葉枯病 黒斑病の病徴とそっくりですが、黒斑病と比べると肥料切れすると発生しやすく、葉先から上半部にかけて病斑ができ、葉ネギでは黒斑病より葉枯病が目立ちます。
- 6) ネギアザミウマ 体長 1.3mm 程度で年 10 世代以上を繰り返し、葉の表面をかすり状に食害し商品価値を低下させます。乾燥条件を好み、特に空梅雨の年は多発します。大雨や豪雨の後は急激に密度が低下します。年間発生回数が多いので、こまめに発生状況を把握し、適期防除に努めます。
- 7) ネギコガ 幼虫は 9mm 程度に達し、年 5～8 世代繰り返し、特に 5～6 月と 10 月頃に多発します。幼虫が葉の内部から食害し線状の白斑を残します。終

齢幼虫は葉の表に網状の繭を作り蛹となります。

- 8) ネギハモグリバエ 幼虫は 4mm 程度のウジで葉の内側から葉肉部を食害し、ネギコガの食害痕とよく似た症状を呈します。老齢幼虫は地中にはいり蛹化します。また成虫は規則正しく並んだ白点の傷を作ります。5 月頃から発生し、年 5～6 世代を営みます。
- 9) シロイチモジヨトウ 成虫は 5 月頃から 11 月まで発生しますが、ネギ圃場における幼虫の発生は 7 月頃から認められ、被害は 9 月頃ピークに達し 11 月まで続きます。若齢のあいだはネギコガの被害によく似た症状を呈しますが、卵塊があった近くに被害が集中し、4 齢以降は大きく根本にむけ食害し、葉身内に虫糞が溜まり、老齢幼虫は 30mm に達します。広食性でネギ以外にもスイカ、ニンジン、ダイコン、カーネーション等野菜類や花卉類 50 種以上の植物を加害します。薬剤による防除は若齢のうちに行うよう努めてください。

ネギ類病害の特色

病害	胞子の発育温度	雨の影響	主な被害作物
さび病	15～20	+	ネギ、タマネギ、ニンニク、ニラ
疫病	10～37	+	ネギ、タマネギ
べと病	13～15	+	ネギ、タマネギ、ワケギ
黒斑病	6～34	+	ネギ、タマネギ、ニンニク、リーキ
葉枯病	20～25	+	ネギ、タマネギ、ニンニク